



Title	教材研究としてのマドレーヌ・ヴィオネ : ハンカチーフ・ドレス1920
Author(s)	鈴木, 桜子
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 154-155
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53019
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

教材研究としてのマドレーヌ・ヴィオネ

—ハンカチーフ・ドレス 1920—

鈴木桜子／杉野服飾大学

杉野服飾大学ファッション文化論コースでは、平成14年度から学部3年生を対象に学内制作週間の一環として、マドレーヌ・ヴィオネ作品の再現に取り組みはじめた。マドレーヌ・ヴィオネ (Madeleine Vionnet 1876～1975) は、1920～30年代にかけてオートクチュール界で活躍したクチュリエールである。

1920年代は、女性の意識に大きな変化が見られた時代であり、衣服は女性の行動力と自立を反映するものとなった。ヴィオネ、シャネル、スキヤパレリといったデザイナーが出現し、「現代衣服の源流」がかたちづくられることとなった。とりわけヴィオネの考案したバイアス・カットによるドレスは、コルセットを外し、それまでの衣服の構造を根底から変えるとともに、衣服と身体との関係に革新を生み、新しい美の規範をもたらした。これは、当時の芸術・デザイン・建築の動きと並行するものであり、近年の服装史研究でも指摘されている。

ヴィオネの服は、女性の凹凸のある身体に自然になじみ、本来の身体の美しさを表現する。彼女のドレスは、デザイン画からパターンを起こすという通常行われる制作工程を経ない。1/2大の木製マネキンに一枚のモスリンを当て、ドレーピングをしながらデザインを決定していく。それを実物大に置き換えて制作していく。

ヴィオネはこのドレーピングの過程で有名な「バイアス・カット」の手法を編み出す。この手法は布に新しい表情を与えることになった。バイアス・カットにより布に与えられた独自の伸縮性は、布に独特なドレープを生む

こととなり、この手法は新しいデザインの可能性をもたらすこととなった。

ヴィオネのドレスの構成は、幾何学的なパターンである。ヴィオネ自身、「クチュリエとは幾何学者であるべきだと思います。なぜかという人間の体は幾何学的な形をしているので、それに布地を関連づけなければならぬからです。」と述べているように、彼女は身体の各部を幾何学的形態として捉え、実際のドレスの構成は、平面の布に置き換えたときにも幾何学的図形が組み合わされたようなものであった。

今回、杉野服飾大学ファッション文化論コースでは、ヴィオネの初期の作品から、シンプルながら最も美しい作品の一つといわれる「ハンカチーフ・ドレス」(1919/20)を選び、再現を試みた。その目的は、最終的なドレスの形の背後に隠され見落とされがちな、素材、パターン、構造、縫製、形態の相互関係を理解することにあつた。また日頃、デザイン史、服装史を学ぶファッション文化論コースの学生に、ヴィオネの歴史的意義を認識するきっかけを与えることにあつた。

ドレスの再現に当たっては、メトロポリタン美術館で20年以上に亘ってヴィオネの研究を手がけてきたベティ・カークの著書『VIONNET』(1991)を参考にし、彼女の研究を辿りながら制作を行なった。

制作にあたって、まず試みなければならなかったのは、縫製方法、そしてパターンと生地との扱い方を確認することだった。これらを

確認するために、実寸大を制作する前に1/2大のトワルで試作することからはじまった。その結果、幾何学的パターンと正バイアスの関係や、肩ダーツのかわりにねじれの手法を用いること、ジャボを美しく見せるために、故意に折代を表地に倒す等、細かな工夫を確認することができた。

こうして1/2大トワルから実物大制作に至る過程において、ヴィオネのデザインについての理解を深めることができた。それは、

1. ヴィオネの幾何学的パターンがバイアス使いによって身体になじむドレスを表現すること
2. シンプルな構成と構造が同時に合理的な縫製方法と着心地、さらに装飾的機能も果たしていること
3. 服の構造、身体の構造を前身頃・後身頃だけでなく、両脇も同様にして、身体を筒状の立体と捉えていること
4. ヴィオネがひとつの素材（一枚の布）を追求した上で成したドレスデザインの可能性が無限にあること、である。

これらの多くはすでに先学者たちが指摘してきたことではあるが、文献を読んで理解していたことと、実際に制作を通して理解することには大きな違いがあることを学生たち自身のみならず、指導者自身も実感した。

再現されたハンカチーフ・ドレスは、縫い終わってもそのフォルムを表さない。ヴィオネのドレスは、身体に着せられてはじめてフォルムを表す。今回も、学生たちがボディに着せてはじめてその姿が明らかになった。全ての工程が最終的なフォルムとなって表れたのだった。

ボディに着せられたハンカチーフ・ドレスは予想以上に美しいフォルムを見せた。両肩から前身頃・後身頃に自然に垂れ下がるバイアスは、裾の部分でハンカチーフヘムラインとなり、前後開きの部分からジャボとなって

表れる部分は左右対称のカスケードをあらわした。学生たちはこの最後のフォルムを見て、自分達がやってきた工程ひとつひとつがフォルムに結びついていたことをここではじめて認識することとなった。

難解といわれるヴィオネのドレスを実際に制作することで、ただ資料を読んだだけではわからないことが、実作を通して実感として理解することができたのは大きな収穫であった。1点だけの制作ではあったが、与えられた制作日数は5日間、学生6人で取り組むには十分な手ごたえであった。

学生達自身がこれまで授業の中で制作してきた服は、どれも曲線裁ちのパターン構成によるものである。人体の形状に沿うようにダーツを入れ、布の張りを持たせる部分には芯を入れ、そしてすべりの良い裏地を縫い付けて縫い目や構造を隠す。一枚の布からできるヴィオネのドレスはこれらのどれにも反するものだった。

ファッションの世界では、とかく最後に現れる服のデザインに評価が下される傾向があるが、パターン、構造まで遡ってデザインを理解するためにはヴィオネの作品は最適な教材の一つと思われる。

今回は、初めての試みとしてハンカチーフ・ドレスを取り上げた。今後も、ベティ・カークの研究をもとに、学生とともに作品の再現に取り組んでいく。この積み重ねを教材研究の資料の一助として、ヴィオネの衣服デザインについて更に考察を深めていきたい。